

## 「研究ノート」 イギリス国王のクリスマス・メッセージの由来を考える

本田毅彦

### 一 ロイヤル・クリスマス・メッセージとダルシヤン

本稿では、「ロイヤル・クリスマス・メッセージ」と呼ばれるイギリス社会の慣行と、「ダルシヤン」と呼ばれるインド社会の宗教上の慣行が、メディア史的観点から見ても、ある興味深い経緯により結びついている可能性を明らかにしたい。

#### (一) ロイヤル・クリスマス・メッセージとは？

イギリス社会では、毎年十二月二十五日にイギリス国王が、テレビ、ラジオ、インターネットを通じてクリスマスを祝うメッセージをイギリス国民（およびイギリス国王を元首とするイギリス連邦加盟諸国）に宛て

て送る。そしてこのような慣行が、「ロイヤル・クリスマス・メッセージ」と呼ばれている。両大戦間期に始まったものであり、当初はラジオを通じてのみ行われた。イギリス国王が、自分の執務室から諸メディアを利用して個々の視聴者に向かい数分間にわたって直接語りかける、という形がとられている。

イギリス社会では、クリスマス休暇は主としてそれぞれの家族の中で過こされる。親元を離れている子供たちも休暇を利用して帰省する。十二月二十四日のクリスマス・イヴには家族で近隣の教会へ足を運び、深夜ミサに参加することもある。二十五日のクリスマス・デイの朝には、クリスマス・ツリーの下に置いてあったプレゼントを交換する（子供も親にプレゼントを渡

す)。家族全員で、クリスマス・ランチを食べる。七面鳥のロースト、ハムなどがメインであり、クリスマス・プディングも楽しむ。そして午後二時から、ロイヤル・クリスマス・メッセージを主としてテレビで、家族でともに視聴することが多い。その後には、腹ごなしの散歩がてら、近隣に住む親戚や親しい友人の家を訪問し合う。夜はテレビの特別番組（比較的近年にヒットした映画など）を家族とともに視聴する。二六日にはデパート、衣料品店などでのバーゲンセールへと繰り出す。こうした一連の流れの中で、ロイヤル・クリスマス・メッセージの視聴は、多くのイギリス人たちにとりクリスマス休暇中の欠かせないディテールの一つであり続けてきた。

ロイヤル・クリスマス・メッセージは、実質的にイギリス国王が、公式の場で自分の思いや考えを自分の言葉で表現して国民全体に伝えることのできる、数少ないスピーチの機会でもある。これ以外の、国民全体に向けてのイギリス国王の公式のスピーチは、そのほ

ぼすべてが政府によって作成され、国王は基本的にそれを読み上げるだけ、である。クリスマス・メッセージにおいて国王は、この一年の間に起こった公私様々な重要な出来事を回顧し、それらについてコメントする。そして翌年に向けての希望を語っている。

## （二）現代インド社会における「ダルシヤン」とは？

他方、現代インド社会では、「ダルシヤン」と呼ばれる宗教上のイヴェントが、頻繁に、また時として大規模に行われている。いうまでもなく、インド社会は現在も強く宗教性を保持しており、人々の生活の中では宗教的性情帯びた活動の占める割合が高い。またインド社会は顕著な多宗教社会でもある。ヒンドゥー教、ジャイナ教、イスラーム、キリスト教、シク教、仏教などを、それぞれ熱心に信仰する人々が多数いる。その結果、「インド社会のカレンダー」では、宗教的な祝祭の無い日はほとんどない」とまで言われるほどである。そうしたインド社会の宗教的環境のなかで強い存在感

を發揮しているのが、「ゴッド・マン」(god-man、神人)と呼ばれる人々である。インド社会には、「超自然力を有して、そうした力を人々の願望をかなえるために用いることのできる『聖人』が存在する」と考える人々が(主としてヒンドゥー教徒の中に)多い。

そのような「聖人」は、神と人間の間にある存在だとみなされ、半ば信仰の対象とされる。インドのメデアアは、擲擲を交えて、こうした聖人を「ゴッド・マン」と呼ぶ。インド社会の政治家たちと密接な関係を持ち、強い影響力を行使する「ゴッド・マン」もいる。

そして「ゴッド・マン」を尊び(信仰し)、そうした人との「対面」を非常に喜びとする人々があり、彼らとゴッド・マンの対面の儀式が「ダルシヤン」と呼ばれる。それにあたる表現を日本語のなかに探すとすれば、「お目見え」(貴人にお目にかかること)や「接見」(高位の人が公的に人に会うこと。例えば、「教皇が信徒を接見する」ということになるのだろう。自分が「ゴッド・マン」の姿を目にするだけでなく、自分の姿を

「ゴッド・マン」に見てもらふことで、自分にも超自然的な靈力が及ぶ(与えられる)、と考えられている。つまり、「ゴッド・マン」との間で靈的な相互作用、コミュニケーションが生じることが期待されている。

(三)二つの慣行の間には、ある接点がある。英領インドの歴史

ロイヤル・クリスマス・メッセージとダルシヤンという、一見したところ全く無縁に見える二つの慣行の間には、ある接点が存在する。それは英領インドの歴史である。近代においてインド亜大陸は長期間イギリスの植民地だった。一七世紀初頭、イギリス人たちは東インド会社をつくり、インドへ赴いて交易を行うようになった。しかし、戦争などを通じてイギリス人たちはインドの地を手に入れ、支配するようになっていく。一九世紀初頭までには、イギリス人たちはインドのほぼ全域を征服するに至る。一九四七年にインドとパキスタンが分離独立するまで、イギリス人たちはイ

インド社会の支配を継続した。

この間、インド文化とイギリス文化の間で、様々な相互作用が生じた。イギリス人はインド社会を支配するためにインド社会を「イギリス化」させようとしたが、他方で、統治の便宜のためにインド社会のありように自らが「適応」する必要もあった。そのことが、イギリス本国の社会にも影響を及ぼした。

インドにおいて交易を行い、統治を行う必要性から、イギリス人たちはインドの文化に大きな関心を示した。インド社会の側でも、イギリス人たちが携えている近代ヨーロッパ文化に強い関心が示された。一九世紀前半のイギリス人たちの間では、支配者としての権力を用いてインド社会を強制的に「イギリス化」させようとする傾向が強まった。この結果、イギリス文化とインド文化の間での全面的な対立が生じ、一八五七年のインド大反乱（セポイの乱）につながった。反乱を鎮圧した後、むしろイギリス人たちは、インド文化に一定の譲歩を行うことにより、インド社会における自分

たちの地位を維持しようとするようになった。その一環として、インド社会における伝統的な権力者たち（旧ムガル皇帝、インド人藩王たち）のありようが、イギリスによるインド統治の中へ取り入れられていった<sup>(1)</sup>。

そうしたプロセスを経て行われるようになったのが、ロイヤル・クリスマス・メッセージだった。インド社会では、長く伝統的に権力者と臣民の間で直接的なコミュニケーションの回路が開かれており、そのようなコミュニケーションも「ダルシャン」と呼ばれていた。一九一一年には、イギリス国王Ⅱインド皇帝であるジョージ五世がインドへと赴き、彼なりの「ダルシャン」を行った。そしてジョージ五世は、一九三〇年代にラジオ放送を通して「ロイヤル・クリスマス・メッセージ」を開始した人物でもある。

## 二 ムガル帝国におけるダルシャン

## (一) 元来の意味でのダルシヤン

ダルシヤンは、インド亜大陸で生まれた様々な宗教において、古代から伝統的に行われてきた「慣行」だった。人々が「聖なる存在」を目にし、逆に「聖なる存在」から見つめられることを至上の喜びとする、というものであり、仏教の信仰のありようの中にも、こうした慣行は存在した<sup>②</sup>。

さらにインド社会では、政治的権力者に関してもこうしたダルシヤンの慣行が行われていた。政治的権力者たちも一定の「聖性」を保持すると見なされたからである。政治的権力者たちは宗教団体、宗教施設、宗教行事などの主要な支援者、支持者、保護者であることが普通だった。そのため、政治的権力者たちと宗教的事象の間の関係は密接であり、民衆の眼から見れば、区別がつかない(区別することに意義が見いだせない)こともありえた。

いずれにしても政治的権力者は「力」(政治権力、軍事力)を可視的に行使する存在であり、民衆に対する

「恩恵」を可視的に与えることもする存在だった。

## (二) ムスリムたちによるインド亜大陸の征服

インドにイスラームが伝わったのは七世紀のことだった。インド西部のマラバル海岸へやって来たアラブの貿易商がその役割を担った、とされる。つまり海洋を渡っての伝来だった。これに対し、十二世紀のムスリムの侵攻によってインドの在地的権力は大きな打撃をこうむったと考えられているが、これらのムスリムたちは、中央アジアから発して現在のアフガニスタン経由でインド社会へと南下した。つまり、陸伝いで侵攻だった。ムスリムたちによる政治的支配の下で既存のインドの宗教から離れ、イスラームへと改宗した者たちもいた。しかし、インド的な宗教慣行を維持する人々が大半だった。

インドにおけるイスラーム王朝としては、デリー・スルターン朝(一二〇六―一五二六年)が広く知られている。奴隷王朝、ハルジー朝、トウグルク朝、サイ

イド朝、ローディー朝が興亡した。そしてデリー・スルターン王朝の後に現れたのがムガル帝国（一五二六―一八五八年）だった。ムガル帝国もデリー、アグラを都とした。そして一七世紀末以降、インド亜大陸のほぼ全域をその支配下におさめるに至った<sup>(3)</sup>。

### (三) アクバル大帝の統治手法

ムガル帝国三代目の皇帝がアクバル（在位は、一五五六―一六〇五年）である。ムガル帝国を拡大させ、安定させることに成功した。とりわけ彼は、ヒンドゥー教徒などの非ムスリムに課せられていた「ジズヤ」（人頭税）を廃止するなど、宗教的寛容策を実施したことで知られている。さらに自らの宮廷を中心として文芸、美術、音楽、建築などを促進し、奨励することにより、インド・イスラーム文化を隆盛へと導いた。その具体的な成果がミニアチュール絵画の伝統や、フアテプル・シークリー市の建設である<sup>(4)</sup>。

そしてこのアクバル大帝こそが、インド社会におけ

る「ダルシヤン」の伝統を政治的に応用する手法を公式化した、と考えられている。アクバルは異なる宗教の間での対話を奨励することにも積極的だった。自らの宮廷に、イスラームの学者、ヒンドゥー教のブラーフマン（僧侶カーストに属する人物）、カトリックの宣教師などを招き、宗教・信仰に関して対話を行わせた。

また、インド亜大陸に現れたイスラームの聖人だが、ムスリムのあいだだけでなく、多くのヒンドゥー教徒たちからも尊崇された人物を核として構成される、「スーフィズム」（イスラーム教神秘主義）と呼ばれる信仰にも熱心だった<sup>(5)</sup>。

さらにアクバルは、宮廷内の限られた範囲においてだったが、自身を神格化する運動を始めた。自分の肖像画に神聖性の象徴として光背を描かせている<sup>(6)</sup>。そして彼は、自らの居城の窓に、ほぼ毎日、決まった時間に姿を現し、臣民たちとの間で「ダルシヤン」を行うようになった。その様式は、まさしくヒンドゥー教聖人たちの「ダルシヤン」の応用だった。

アクバルの後を継いだ歴代ムガル皇帝たちも、そうした慣行を継続した。彼らはアグラ、デリーに壮麗な居城を建設していったが、その居城の外壁の一角には、「ジャロカ」と呼ばれる、優美な装飾を施した出窓が必ず設けられた。皇帝たちはアクバルに倣って、ほぼ毎日、決まった時間にジャロカに姿を現し、外壁下の空き地に集まった民衆との間で「ダルシャン」を行なった<sup>7)</sup>。

皇帝たちはまた、毎週金曜日にジャーマジッド（集団礼拝のための大規模なモスク）で行われる礼拝にも参加した。その際、アグラないしデリーの民衆は、皇帝を載せた巨象を中心とする豪華で美麗な行列が皇帝の居城からジャーマジッドへと赴く姿を目にすることができた。

やがて、インド各地の藩王たち（ムガル帝国の支配下に入った、主としてヒンドゥー教徒の藩王たち）も、ムガル皇帝が始めた政治的ダルシャンの手法に倣うようになった。藩王たちは、「帝国のエリート」と

して、ムガル皇帝権力との間で密接な政治的關係を築きつつあったが、社会的、文化的にも、ムガル皇帝の宮廷と藩王たちの宮廷の間での交流は、イスラームとヒンドゥー教という宗教上の垣根を越えて活発化していった。かくして、政治的ないし宗教的な意味合いを帯びた儀礼に関しても、ムガル皇帝家と諸藩王家は、相互に影響を与え合いながら一定の様式を共有するようになった<sup>8)</sup>。

### 三 一九一一年コロネーション・ダーバーにおけるダルシャン

(一) インド社会の政治支配層の間で行われてきたダーバーという儀礼

インド社会は、様々な文化的特性を持つ、諸共同体の集積である。インド亜大陸は広大であり、そこに居住する人々の数も多い。実際には、面積の面でヨーロッパ大陸より大きいだけでなく、人口の面でも常にヨ

ヨーロッパ社会よりも多かった。インド社会はまた、高度の多宗教社会であり続けてきた。それぞれの宗教集団は、インド社会に属しながらも、それぞれが独自の共同体を構成している。さらに、ヒンドゥー教内部におけるカースト原理も、カーストごとの（無数の）共同体を構成させるものである。従ってインド亜大陸に散在して生活する多くの人々を政治的に統合しようとするならば、一定のテクニクが必要だった。

統一権力の下で、当然のように諸共同体には一定の「自治」が認められた。しかし諸共同体のエリート（通常、国王）は定期的に統一権力が所在する場所に参集し、統一権力の保持者（通常、皇帝）に集合的に忠誠を誓い、統一権力と自らの利害を調整するための交渉を行い、諸共同体間の軋轢の調停を統一権力に求めることになった。さらに、優位な地位にある権力者に対して、劣位の地位にある権力者が忠誠を誓う政治的儀礼が、社会全体の様々なレベルで行われ、不可欠の機能を果たすようになっていった。それらは「衆人環

視」の中で行われることが前提であり、「ダーバー」と呼ばれた<sup>9)</sup>。

しかし、とりわけて重要だったのが「コロネーション・ダーバー」（権力者の即位の際に行われるダーバー）だった。新たな権力者（皇帝、国王）の即位（誕生）が宣言され、それを集団的に承認することを明示する儀礼としてコロネーション・ダーバーは行われた。それは言わば現代の民主主義社会における「選挙」に相当するものだった。

## （二）イギリス人たちがインドで行ったダーバー

インド大反乱発生の責任を問われた東インド会社は一八五八年に解体され、イギリス本国政府がインドを直接支配することになった。インド大反乱以前、東インド会社は言わば「影に隠れた権力者」であり、ムガル皇帝の権威が、全く形式的なものだったが維持されていた。そのため政治的儀礼に関しては、ムガル帝国の伝統的様式に則って行われた。違和感を抱きな

がらもイギリス人たちは、インド社会で行われてきた「ダーバー」という政治儀礼に参加した。忠誠を示すための所作（とりわけ、いわゆるハグ「抱擁」、信頼関係を確認するためのプレゼントの交換など）に関して、イギリス人たちは時として嫌悪感すら抱いたが、従わざるを得なかった<sup>(10)</sup>。

一八七七年以降、英領インド植民地は「英領インド帝国」を名乗るようになった。インド大反乱を鎮圧した直後、インドの支配者がイギリス国王（ヴィクトリア女王）となったことが宣言された。これにより政治儀礼においても、イギリス国王のインドにおける代理人であるイギリス人の総督や官僚たちを明示的に「主役」とする形がとられるようになった。しかしインド大反乱鎮圧後、一八七〇年代半ばまで、インド副王・総督の任命がすべてイギリス本国の自由党が組織する内閣によって行われたせいもあり、その間に任命されたインド副王・総督たちは、新たな政治儀礼のデザインについて熱心ではなかった。

むしろ、本国のイギリス人たちの王権に近い部分が、インド社会におけるインド人藩王たちの「権威」を、イギリス人たちによるインド統治を継続するために活用する術を模索し始めた。パンジャブにあったシク王国の元国王ダリブ・シングは一八五〇年代に幼くしてイギリスへ連れて来られ、あたかもイギリス王室のメンバーであるかのような形で育てられていた。成人後にイギリス王室の政治儀礼に参加するようになったダリブ・シングのたまたまが、そうした政治儀礼において「帝国としてのイギリス」を表象する手段として効果的であることにイギリス人たちは気づき始めた<sup>(11)</sup>。

イギリス人たちは、「ヴィクトリア女王（インド女帝でもある）を頂点として、その下に彼女に忠誠を誓うインドの諸藩王がいる」とのイメージをインド社会で定着させる、という手法に思い至った<sup>(12)</sup>。一八七〇年代半ば、保守党指導者デイズレーリがイギリス首相の地位に就き、イギリス国王が、その称号においてイン

ド皇帝をも名乗る形に「国王称号法」を改正する<sup>(13)</sup>。  
ヴィクトリア女王自身も「皇帝」の称号を得ることを望んでいた。デイズレーリは、自分の任命したインド副王・総督ロバート・リットンが発議した、ヴィクトリア女王が「イギリス女王Ⅱインド女帝」となったことを広くインド社会に告知するためのイヴェント（ダーバー）を行う、というアイディアに賛意を表した。

一八七七年、インドの古都デリーで、ヴィクトリア女王がインド女帝となったことを宣言するためのイヴェント（当時は「インペリアル・アセンブラージュ」と呼ばれた）が実施された。イヴェントの会場が英領インドの首都であるカルカッタではなくデリーとされたのは、デリーがムガル帝国を含むインドの歴代王朝が首都として定めてきた場所であり、またイギリス人たちがインド大反乱を鎮圧し、自らのインドでの覇権を確定させた場所でもあるなど、多くの象徴的意味を帯びていたからだだった。ただし、本来ならばイヴェントのハイライトになるべき、藩王たちがイギリス国

王Ⅱインド皇帝の代理人である副王に対して忠誠を誓う所作は、公開の形では行われなかった。藩王たちのプライドの競合のせいで、藩王たちがそうした所作を行う順番を決めるのが極めて困難だとリットンが判断し、巨大なテントの中で「集団謁見」の形をとることにしたから、だった<sup>(14)</sup>。

一九〇三年にはエドワード七世のインド皇帝への即位を宣言するために、さらに大規模に、またメディアを通じて藩王たちの存在とその権威をクローズアップする形で、二度目のコロネーション・ダーバーが、やはりデリーで行われた。一九〇三年ダーバーの主幸者となった、時のインド副王・総督ジョージ・カーゾン は、その政治家としてのキャリアにおいてメディアの活用の際立つて意識的な人物だった<sup>(15)</sup>。世界各地を探訪し、そうした経験を新聞雑誌などに寄稿し、書籍を刊行することにより「帝国の政治家」としての声望を築こうとしてきた。一九〇三年ダーバーにおいてカーズンは、藩王たちに主要な役割を演じることを求めた。

つまり、ダーバーは政治的なプレゼンテーションであり、藩王たちはその不可欠のアクターなのだ、と<sup>(10)</sup>。

藩王たちが新国王Ⅱ皇帝の代理人であるカーゾンに対して忠誠を誓う所作は特に念入りに準備され、今回は多くの観衆が見守る中で行われた。イヴェントの一部始終は、映画を含む種々のメディアによって記録され、広く報道された<sup>(11)</sup>。

### (三) 一九二一年コロネーション・ダーバーにおける ダルシヤン

一九二一年、ジョージ五世のインド皇帝への即位を宣言するために、三度目のダーバーが德里で行われた<sup>(12)</sup>。ジョージ五世夫妻自らがインドへ赴き、イヴェントの主役を演じた。ジョージ五世はインドを訪ねることに極めて熱心だった。皇太子時代にインドを訪問しており、「国王」としての自らの役割と地位を維持していく上でインド統治が持つ意義が非常に重要だと考えていた。この時期には既にヨーロッパ列強間の関係

が緊迫しており、国王自身が赴いて、イギリスによるインド統治の基礎を安定させなければならない、とも考えていた。一九〇三年ダーバーの詳細な実施要領をカーゾンが残していたため、イヴェントの基本的段取りは一九〇三年のそれに依拠して決められた。ただし今回は、国王Ⅱ皇帝自身がその主宰者となるため、一九〇三年の時に比べてイヴェント全体の規模がさらに拡大された。

加えて今回は、インド人民衆のイヴェントへの関わりを前面に押し出そうとした。そのために、「ボードシヤーヒ・メラ」(「皇帝の祝祭」の意)が行われることになった。一九二一年ダーバーの最大の特徴は、このイヴェントを通じて、イギリス統治権力とインド人一般民衆の間でのコミュニケーションの回路を開こうとしたことだった。そのために、前二回では、公式のイヴェントに関しては、民衆はそれを遠巻きに見守るだけだったのを、数万人単位の民衆がそれを着座して目撃できるような形で会場の設営が行われた。公式のイ

ヴェントが行われる会場は、前二回と同様にムガール皇帝の旧居城（ラール・キラ）から数キロ離れた所にあつたが、こうしたイヴェントを目撃するためにデリーを訪ねてきた民衆は、城と、城の傍らを流れるジャムナ河の間の広大な河原に設けられた、臨時の宿泊場所に集められた。その河原は、ムガール帝国時代には、ほぼ毎日、多くのデリー市民がそこに集まり、城壁のジャロカに現れる皇帝との間で交歓（ダルシヤン）を行つた場所でもあつた。臨時の宿泊場所では、デリー市民の有志たちが中心となり、数週間にあつてスポーツ競技会、芸能大会、花火の打ち上げなどの様々な娯楽が民衆のために提供された。食品、土産品を販売する出店も並んでいた。公式のイヴェントが行われた日の翌日の午後、イギリス国王Ⅱインド皇帝の正装に身を包んだジョージ五世夫妻が城壁のジャロカに現れた。そして、城壁の下を、隊伍をなして行進し、国王Ⅱ皇帝夫妻に向かって万歳を叫ぶ、十数万人のインド人民衆との間で「ダルシヤン」を行つた<sup>(19)</sup>。

同日、同時刻に英領インド帝国各地で、新たなインド皇帝の誕生を祝うイヴェントが行われていた。それらはデリーでのイヴェントのミニチュア版とも称するべきものであり、末端の村落レベルでも熱心に行われた。ただし、そうしたミニチュア版イヴェントでの「ダルシヤン」は、イギリス国王Ⅱインド皇帝夫妻の肖像画あるいは肖像写真との間で行われた。さらに、デリーでの「ダルシヤン」の顛末を撮影したシークエンスを含む、コロネーション・ダーバーの全貌を捉えたカラー・ドキュメンタリー映画がインド各地で（世界各地でも）上映されることになった<sup>(20)</sup>。

#### 四 イギリス社会におけるロイヤル・クリスマス・メッセージの伝統

##### （一）一九一一年コロネーション・ダーバー後のジョージ五世の活動

ジョージ五世は、イギリスにとり「総力戦」となつ

た第一次世界大戦において、イギリス本国の国民だけでなく、イギリス帝国の臣民全体の士気を鼓舞するために積極的に活動した。前線の兵士たちの慰問、軍病院に収容された傷病者の慰問などを重点的に行った。その際には「民衆」との直接的コミュニケーションが心がけられ、演出された（記録映画として撮影され、イギリス本国、イギリス帝国の各地で上映された）。コロネーション・ダービーでの経験が、彼がこうした活動を行うにあたっての重要な参照軸になっていたはずである。

イギリスは第一次世界大戦の戦勝国となり、イギリス帝国はその支配領域をさらに拡大した。しかしイギリス王室の人々は、言い知れぬ不安に駆られてもいた。ジョージ五世は、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世との間で父方の従兄弟どうしであり（ともにヴィクトリア女王の孫だった）、ニコライ二世との間では母方の従兄弟どうしだった（二人の母親たちが、デンマーク王家出身の姉妹だった）。敵となったヴィルヘルム二世は、革

命の中でドイツ皇帝の地位を追われてオランダへ亡命した。同盟国だったロシアでも革命が起こっており、ニコライ二世は家族ともども共産主義者たちの手で殺された。とりわけロシア皇帝家の運命が、ジョージ五世に衝撃を与えた。ニコライ二世だけでなく、その妻も彼のいとこだった（ともにヴィクトリアの孫だった）ため、第一次世界大戦前、イギリス王室とロシア皇室は毎年のように夏季休暇をともに過ごすなどして、その関係は親密だった。それにも関わらず、ジョージ五世はニコライ二世一家を「見捨てた」。後者がイギリスへの亡命を望んでいたのにも関わらず、それを拒み、結果的に彼らの死を招いた。

ジョージ五世は、ロシア革命をもたらしたような状況が交戦国の社会すべてで進行している、と感じていた。すなわち、総力戦体制の中で社会の平準化が進む一方、戦争前には当然のように受け入れられていた、社会の「権威の体系」への強い反感が生じている、と。彼がロシア皇室を「見捨てた」のも、対ドイツ戦に勝

利できず、戦時下の耐え難い生活苦をもたらしたせいでロシア人民衆から強い恨みを買ったようになっていた。ロシア皇室を仮に保護すれば、イギリス社会の民衆からも強い反発が生じ、我が身も危うくなるのではと恐れられたからだった<sup>(2)</sup>。ジョージ五世は、国王の地位が、民衆からの「漠然とした支持」により可能になっているという事態を認識し、そうした支持を取り付けるための努力を行うことを決意した<sup>(2)</sup>。

第一次世界大戦後もジョージ五世はイギリスの各地を訪ね、街頭に出て、民衆との間で「コミュニケーション」を図る努力を続けた。イギリス各地で戦死者を悼む様々な活動が行われており、民衆と「思いを共にする」ことを可能にするイヴェントとしてイギリス王室はこれらにも積極的に参加した。ジョージ五世の名代として皇太子（後のエドワード八世）、次男（後のジョージ六世。現在のイギリス国王の父親）も活動した。王室のこうした活動は、様々なメディアを通じて報道された。王室と民衆の間のコミュニケーションを促進

するためにマスメディアの力を活用することにも、ジョージ五世は自覚的だった。

## (二) BBCの誕生

無線通信により、受信機（ラジオ）を保持する不特定多数の人々に向けて様々な情報を伝えるという新たなマスメディアのありようが、一九二〇年代のアメリカ合衆国で登場した<sup>(3)</sup>。イギリスでは、British Broadcasting Corporation (BBC) が、一九二七年に公共機関として設立され、ラジオ放送を行うことになった（既に一九二二年に British Broadcasting Company として誕生していたが、一九二七年までは公共機関ではなかった）。BBCの役割は、ラジオというマスメディアを通じて、イギリス国民に「inform」し（様々な情報を提供する）、「educate」し（様々な教養を提供する）、「entertain」する（娯楽を提供する）ことだ、と定められ、そのような原則に基づいて番組が制作され、放送されることになった<sup>(4)</sup>。

そして創立期のBBCを指導し、それに理念と骨格を与えたのが、ジョン・リース (John Reith, 1889-1971) だった。スコットランド出身で、エンジンニアだった。中等教育を終えた後、第一次世界大戦に際して兵士として従軍し、戦後はビジネスの世界に入った<sup>(5)</sup>。しかしその一方で彼は、イギリス社会の文化的・学術的伝統に強い関心を持っていた。従来、イギリス社会のエリート層に限定されていた、そうした文化的・学術的伝統を享受する機会を、ラジオという新たなマスメディアを通じて広く民衆一般にも開放したい、またそのようなになるべきだ、との強い使命感を抱いていた。リースは堅固な自由主義者だったが、イギリス社会における自由主義の伝統を保証する重要な制度の一つとして、王室への信頼と敬意を保持してもいた。

### (三) ロイヤル・クリスマス・メッセージという慣行の開始

一九三二年、BBCは海外向け放送を開始した。カ

ナダ、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリアなど、イギリス帝国を構成する諸社会の短波ラジオ保有者に向けてのもだった。担当する部局は「エンパイア・サーヴィス」と名付けられた。やがて、英語以外の言語での放送も開始された。国際的緊張が再び高まるなか、自国の主張を他の社会に伝え、説得するためのメディアとしてもラジオが活用され始めた。こうした経緯から「エンパイア・サーヴィス」は、「海外サーヴィス」→「ワールド・サーヴィス」へと名称を変更される<sup>(6)</sup>。

エンパイア・サーヴィスが開始されるのにあたって、イギリス帝国の諸社会に住む人々の関心を惹きつけ、新たに短波ラジオを購入する動機づけを与えることが必要だ、とリースは考えた。イギリス国王および王室の動静は、イギリス帝国の諸社会に住む人々にとり、共通の、強い関心の対象だった。さらにイギリス王室は、第一次世界大戦に際してイギリス帝国を構成する諸社会から大きな貢献が行われたことに強い印象を受

けていた。大戦後、ジョージ五世は、息子たち（皇太子と次男）に帝国の各地を訪問させ、王室とそれらの社会の絆を強めようとした。こうした事情を認識したりースは、ジョージ五世に対して、エンパイア・サーヴイスを通じてイギリス帝国の諸社会に住む人々に向けてクリスマス・メッセージを自らの声で届けてはどうか、とのアイデアをもちかけた。イギリス社会は近代的郵便制度を発達させた国でもある。クリスマス・シーズンに祝いのメッセージを記したカードを交換する習慣が、既に長く行われていた（日本社会での年賀はがきの交換も、イギリス社会のこうした習慣を応用したものである）。かくしてBBCとイギリス王室の利害が合致し、ロイヤル・クリスマス・メッセージの慣行が開始された<sup>(7)</sup>。

イギリス王室とラジオ放送の間の蜜月関係は、その後も興味深い形で進展した。ジョージ五世が歿した後、に即位したエドワード八世は、離婚歴のあるアメリカ

人女性ウォリス・シンプソンと結婚するために国王の地位から退いた。自らの退位について時のイギリス政府から承諾を得た後、エドワード八世は、宮殿からのラジオ放送を通じて退位を決意するに至った事情を自ら説明し、多くの国民に「感銘」を与えた（「王冠を賭けた恋」と呼ばれた<sup>(8)</sup>）。近年、「イギリス国王のスピーチ」という映画が公開され、世界的なヒットとなった。その中では、エドワード八世に代わってイギリス国王となったジョージ六世が、吃音というハンディキヤップを抱えていたため、ラジオ放送などを通じて国民一般に語りかけるといふ、国王としての新たな役割の遂行に苦勞した姿が描かれている。同作品は基本的にフィクションだが、マスメディアを通じての社会一般とのコミュニケーションがイギリス国王にとってそれほど重要な、果たすべき役割となったことを描いている点は正確である<sup>(9)</sup>。

- (1) D・キヤナダイン(金田雅博)『細川道久伝』『虚飾の帝国—オリエンタリズムからオリナメンタリズムへ』日本経済評論社、二〇〇四年。ジョン・M・マッケンジー(金田雅博訳)『大英帝国のオリエンタリズム—歴史・理論・諸芸術—』シネルヴァ書房、二〇〇一年。
- (2) 一九八八年四月—四日にNHK教育テレビの番組「シラカワの時代」で中村元(東京大学名誉教授)と奈良康明(駒澤大学教授)が以下のような対話を行っている。中村：「インドの聖者バクシツを座つて暫くの間何も言葉が発しない。その境地を楽しんでいるとどうしてが非常にびびります。信者が会いに来るわけです。これを向こうの言葉で『ダルシヤン』と呼びますがね。奈良：「見の(こ)ですわね。」中村：「見の(こ)なんですわね。謁見です。そうするとお目にかかるという(こ)は(こ)お目を楽しんで(こ)る。必ずしも教えを聞かなくてもいいし、また教えを説かない。積尊の場合も最初でうだったんじゃないかと思うんです。二人の商人がそこを通りすがつてお供養をしたという(こ)が出ておられます。また静かな境地を楽しんでおられた。それを一人の商人もあつたが(こ)つた(こ)うわけです。」中村元は「ダルシヤン」に「相見」という訳語をあて(こ)つた(こ)うもあつた。中村元/田辺祥二『ブッダの人と仏教』NHKブックス、一九九八年、五五頁。
- (3) 荒松雄『多摩都市デリー—民族、宗教と政治権力』中央公論社、一九九二年、一七—一八七頁。
- (4) フランシス・ロビンソン(小名康之訳)『ムガル皇帝歴代誌—インペリアルン、中央アジアのイスラーム諸王国の興亡』創社社、二〇〇九年、一八五頁。山本裕子「インドの伝統細密画に(こ)つ」『インダ近代美術の夜明け—カンピー絵画』福園アジア美術館、二〇〇九年、七頁。J.M. Rogers, *Mughal Miniatures* (London: The British Museum Press, 1993), pp. 37-73; Barbara Brend, *The Emperor Akbar's Khamsa of Nizami* (London: The British Library, 1995), pp. 5-6; Rода Ahluwalia, *Rajput Painting: Romantic, Divine and Courty Art from India* (London: The British Museum Press, 2008).
- (5) Anamaria Schimmel (trans. Corrine Attwood), *The Empire of the Great Moghals: History, Art and Culture* (London: Reaktion Books, 2004), p. 35.
- (6) Catherine B. Asher, 'A Ray from the Sun: Mughal Ideology and the Visual Construction of the Divine', in Matthew T. Kapstein (ed.), *The Presence of Light: Divine Radiance and Religious Experience* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 2004), pp. 161-194.
- (7) 榎尾友子「すべわかるイスラームの美術—建築・写本芸術・工芸—」東京美術、二〇〇九年、六〇頁。
- (8) Suniti Kauri-Bauer, *Monumental Matters: The Power, Subjectivity, and Space of India's Mughal Architecture* (Durham and London: Duke University Press, 2011), p. 22.
- (9) S. Hayat A. Zaidi, 'Akbar and the Rajput Principalities: Integration into Empire', in Irfan Habib (ed.), *Akbar and His India* (New Delhi: Oxford University Press, 1997), pp. 15-24; Valerie Bernstein, *Mughal India: Splendors of the Peacock Throne* (London: Thames & Hudson, 1998), pp. 54-57.
- (10) E.M. Collingham, *Imperial Bodies: The Physical Experience of the Raj, c.1800-1947* (Cambridge: Polity, 2007), pp. 128-136.
- (11) Peter Bance, *The Duleep Singhs: The photograph album of Queen Victoria's Maharajahs* (Stroud, Gloucestershire: Sutton Publishing Limited, 2004); *Sovereign, Squire & Rebel: Maharajah Duleep Singh and The Heirs of a Lost Kingdom* (London: Coronet House, 2009).
- (12) Julie F. Codell (ed.), *Power and Resistance: The Delhi Coronation Durbars* (Magan Publishing, 2012).
- (13) John Plunkett, *Queen Victoria: First Media Monarch* (Oxford: Oxford University Press, 2003), pp. 113-118.
- (14) パーナーズ・ウィーン(多和田裕司訳)『ヴィクトリア朝インドにおける権威の表象』E・ホプズボウム/T・レンジャー編(前川啓治/梶原真昭他訳)『創られた伝統』紀伊国屋書店、一九九九年。
- (15) 本田毅彦「1603年インペリアル・ダーバーにカーソンが託した夢」

『帝京史話』三〇卷、一〇一五年。

- (9) Ikram Ahmed Butt, *Lord Curzon & The Indian States 1899-1905* (Bloomington, IN: AuthorHouse, 2007), pp. 19-44; Rosie Llewellyn-Jones (ed.), *Portraits in Princely India 1700-1947* (Mumbai: Marg Publications, 2008).
- (17) Stephen Bottomore, “An Amazing Quarter Mile of Moving Gold: Gems and Genealogy”, *Filming India's 1902/03 Delhi Durbar*, *Historical Journal of Film, Radio and Television*, 15-4, 1995; Stephen Wheeler, *History of the Delhi coronation durbar held on the first of January, 1903 to celebrate the coronation of His Majesty King Edward VII, Emperor of India compiled from official papers by order of the Viceroy and Governor-General of India* (London: John Murray, 1904).
- (18) Sunil Raman and Rohit Agarwal, *Delhi Durbar, 1911: The Complete Story* (New Delhi: Lotus Collection, 2012).
- (16) Calcutta Government Printing Office, *Coronation Durbar, Delhi, 1911* (Calcutta: Superintendent Government Printing, India, 1911), pp. 57, 90-91.
- (20) Stephen Bottomore, “Have You Seen the Cackwar Bob?”, *Filming the 1911 Delhi Durbar*, *Historical Journal of Film, Radio and Television*, 17-3, 1997.
- (13) Miranda Carter, *George, Nicholas and Wilhelm: Three Royal Cousins and the Road to World War I* (New York: Vintage Books, 2011), pp. 404-405.
- (22) Kenneth Rose, *King George V* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1983), pp. 224-229.
- (23) スーザン・J・ダグラス「放送の始まり、デイヴィッド・クロリー／ポール・ヘイヤー編『林進／大久保公雄訳』歴史のなかのコミュニケーション シンポジウム『メディア革命の社会文化史』新曜社、一九九五年、一五六―一七三頁。パトリス・フリッシー『江下雅之／山本淑子訳』『メディアの近代史』水声社、二〇〇五年、一七四―一八四頁。
- (24) 大蔵雄之助「BBCの設立と理念」原麻里子／柴山哲也編著『公共放送BBCの研究』シネルヴァ書房、二〇一一年、三七―四七頁。
- (25) 養葉信弘『BBC イギリス放送協会』パブリック・サービス放送の伝統』東信堂、二〇一二年、七―一八頁。

(26) 原麻里子「BBCワールドサービス―21世紀初頭のイギリスのパブリック・サービスプロマシー機関として」、原麻里子／柴山哲也編著『公共放送BBCの研究』シネルヴァ書房、二〇一一年、二六七―二七三頁。

(27) Rose, *King George V*, p. 394.

(28) 水谷三公『イギリス王冠とメダライアーエドワード大衆王冠の時代』筑摩書房、一九九五年、二〇八―二五〇頁。

(29) マーク・ローグ／ピーター・コンラディ『安達まみ訳』『英国王のスピーチ―王冠を救った男の記録』岩波書店、二〇一二年、一四四―一六六頁。